四類本『保元物語』の時代認識

――冒頭のことば「中比」をめぐって

清水由美子

一、四類本『保元物語』について

日本の歴史上、死後に人々を恐れさせた怨霊になったとして有名な崇徳院や、伊豆諸島や沖縄までをも舞台に、英雄として語り継がれた源為朝は、『保元物語』の登場人物である。この物語が描く戦いである保元の乱は、天皇家、摂関家、平氏、源氏の四つの家が、それぞれ二つに分かれて対峙することとなったという意味でも特色のある争乱であり、そのために『保元物語』は、政治を動かす権力の闘争とは異なる次元での、親子、兄弟の様々なありようも描かれ、豊かな文学世界を持つ作品である。

一方、保元の乱は、都の中の狭い範囲で勃発した、しかも短期間の戦いであったが、後に、この戦いに関わった藤原忠通の息慈円が、歴史書『愚管抄』において、「ムサノ世」（武者の世）になるきっかけとなった争乱だったと評したように、江戸幕府の滅亡まで長きにわたって続く、武士が社会の表舞台に立つ時代の幕開けともなる、歴史的にも大きな意味を持つ画期となった戦いであった。『保元物語』は、こうした歴史の大きなうねりを描いているという点でも注目される軍記作品である。

この作品が、『保元物語』というタイトルを持つのは、もちろん、保元元年（一一五六）に起こった保元の乱を描くからである。その三年後の平治元年（一一五九）に、保元の乱で勝利をおさめた二人の武将が対立し、そのうちの一人であった源義朝が敗れ、勝ち残った平清盛を中心とする平氏一族

が政権の中心に躍り出ることになるのであるが、この戦いも平治の乱とよばれ、その顛末を描いた『平治物語』も成立し、二作品が後世になって、一つのセットのように組み合わされて伝わっていたことも分かっている。さらに、その平氏一門が義朝の子どもたちによって滅ぼされる治承・寿永の内乱を描いた『平家物語』、その後の鎌倉幕府成立ののちの承久三年（一二二一）に起こった承久の乱の顛末を描いた『承久記』は、一つにくくられる時代の四つの争乱を描いた軍記物語ということで、「四部合戦状本」という一つのまとまりとしてとらえられていたことも知られている。そうした内乱を経て、鎌倉幕府の確立という形でできあがっていった武士の時代に生きた人々にとっても、この戦いの起きた保元元年という年は、ある特別な意味を持って受け止められていたことは想像に難くない。それゆえ、この四つの物語の中でも、この『保元物語』だけが、その戦いの時点を、後述するように、「近曾（または、近比）」や「中比」と明示することばから筆を起こすことになったのではないかとも考えられるのである。

さて、そうした『保元物語』にも、他の軍記物語と同様に多くの異本が現存し、そのことは広く享受される中で物語が様々に流動していったことを知らしめている。それら伝本は、これまで詳細に検討され、分類されてきたが、現在、定説となっているのは、永積安明による分類であろう。

永積は、『保元物語』も『平家物語』と同様に「語り」による媒介によって多種にわたる異本群が生み出されたという前提のもと、最も古態を示すとされる文保・半井本を一類にすえ、八類本とした流布本をはさみ九類にまで及ぶ諸本系統を展開させた。筆者自身は、このうちの第二類とされる鎌倉本と、第三類におかれた京都大学付属図書館蔵本（以下、京図本）の系統の先後関係に関しては、今なお検討の余地が残るかと考えているのではあるが、現在の研究状況においては、一応、この永積分類に基づいて、諸本系統やそれぞれの異本の性格を考察するというのが基本になっている。

この中で、金刀比羅宮蔵本（以下、金刀本）をもって代表的な写本として、一つのグループとされるのが四類本である。現存の写本の中でも、古くは最も流布したと考えられており、さらに『平家物語』での覚一本にたとえられる、洗練された本文を持つとされ、現在でも全集などに取り上げられることも多い。古態を示すとして注目の集まっている半井本とならんで、研究においても主要な本文である。

その四類本の大きな特徴は、何と言っても、本稿の冒頭で

も言及した為朝の渡島譚を欠くことである。四類本のうちの一つである陽明文庫蔵宝徳本を底本にした小学館新編日本古典文学全集本の頭注では、「この世で起こり得たことどもを語った、底本等のここまでの話は、歴史を題材とする物語として受け止められるが、為朝鬼島渡りの話には、この世ではあるはずのない内容を含んでいると見て、この物語としては、本来的な語りではないと判断する」と、該本の編纂意図を推定して説明している。古くは最も流布したとされながらも、その本に欠けている内容が広く流布し、結果、版本として広まった流布本は、ほぼ一類本と同じ内容を持つという状況であるのが、『保元物語』の諸本流動の大きな特徴であり、問題点でもあると言えよう。本稿の立場に関わって考えるならば、この問題の根底にも、「歴史とは何か」という本質的なテーマに関わる認識がある可能性が考えられることは重要なポイントである。

　さて、この四類本のもう一つの大きな特徴は、冒頭の一語の違いである。どの伝本も、鳥羽院の崩御後勃発したこの争乱の原因を、その鳥羽院自身の治世のありように見るという立場で物語を語り始め、次のように筆を起こす。

近曾[1]、帝王御座キ。御名ヲバ、鳥羽ノ禅定法皇トゾ申ス。（半井本）
近比帝王御き。御名をは鳥羽禅定法皇とぞ申ける。（鎌倉本）
近来帝王まし〳〵き。（京図本）
中比帝王まし〳〵き。（金刀本）

　四類本の中でも、前述の陽明文庫蔵宝徳本や、東京大学国語研究室蔵の『保元記』と題された伝本では、一～三類本と同様に「近比」（宝徳本）とあり、四類本すべてが「中比」（この語の表記は様々であるが、本稿においては、以下も「中比」で統一する）とするわけではない。後述するように、一類本からの流動の過程で、巻の分け方が様々に変わっていき、それが一定の形に落ち着いていく過程と関わって、「近比」→「中比」の変化が見られるとする見方が提出されており、それが四類本の中での伝本の成長過程を示すことも考えられる。

二、「中比」をめぐる研究史

金刀本が「中比」で始まることについて、一九六〇年三月発表の論文[2]で指摘し、諸本の先後関係や成立時期を探る手がかりとしての重要性に着目したのは永積安明であり、その後の一九六一年初版の岩波書店日本古典文学大系の『保元物語・平治物語』の補説においても、建長六年（一二五四）成立の『古今著聞集』における「近比」と「中比」の用例の検討から、「近比」が半世紀以上は遡らない過去の期間を指すと推定し、「近比」とする諸本の成立がその範囲に含まれる時期のことであり、それから時を経て「中比」とする諸本が成立したとする見解を示している。

同年四月には、栃木孝惟も諸本論におけるこの問題の重要性を指摘している[3]。栃木は後に、四類本の一つで、「近比」で始まる東大本『保元記』の解題[4]において、作品全体の巻の区切り方や巻を区切り目の違いとの関わりに注目し、四類本の中でも上・中・下という巻の区切り方や区切り目が安定して共通している伝本が「中比」で始まり、上・中・下の三巻に分けながらも区切り目が伝本によって安定していない一類～三類本、及び上・下の二巻に分ける宝徳本と東大本保元記が「近ごろ」と始まることを指摘した上で以下のように述べる。

「近比」→「中比」への變改は、鳥羽院在世時を「近比」という時間感覚で捉えた原保元成立時の表現が、時間の進行に伴って不適當表現となり、後代、保元物語を書き變えた改作者が、これを改作時からみた時間感覺によって、鳥羽院在世時を「中比」と改め、表現の適正をはかったものとみられる。そして、こうした巻頭表現の有意の變改は、奇しくも分巻形態の安定化と呼應し、それは寶徳本、東大本を除く他の四類本の段階においてあらわれるのである。とすれば、寶徳本、東大本を除く他の四類本は、いずれも少くとも鳥羽院在世時を「近比」とみることに非條理を感ずる時點に成立し、敢てそれを修正することを選んだ傳本群ということになる。それに對し、四類本中の寶徳本、東大本は、鳥羽院在世時を「近比」と見る時點、「中比」と見る時點のいずれかに成立したかはさだかならずとも、いずれにせよ、未だ「近比」を「中比」に變改する積極的な姿勢を確立していな

かった本文ということになる。

それに対し、犬井善壽は、四類本の室町期成立及び後出性を否定する立場から、永積が典拠とした『古今著聞集』での用例による推測を、『撰集抄』や『閑居友』などといった説話集での用例の幅の広さなどを理由に否定し、「中比」となったのは、「金刀本系本文成立後転写を経る間のことと見るべきなのである」として、この差異に大きな意味を認めることを否定し[5]、さらに新編日本古典文学全集の解説では、「語り手が鳥羽法皇の代を「近比」と見る時間に語るのか、「中頃」と見る時間に語るのかという、もっぱら語り手の語り時間の差異を示す違い」であるとする。

四類本『保元物語』に属する諸本の細かい記事の異同などの検討はまだ十分に行われているとは言えず、巻の分け方や「近比」と「中比」の違い以外の、先後関係を見る手がかりについても今後さらに詳細に見ていく必要があるだろうが、宝徳本は、宝徳三年（一四五一）という文保本に次ぐ古い書写年代を記す奥書を持ち、東大本『保元記』が、宝徳本に近い本文を持つ事は確かであり、この二本と金刀本に近い本文を持つ異本との間に隔たりがあって、それが鳥羽院の御世を「近比」と見るか「中比」と見るかの違いの要因になった可能性は否定できないのではないだろうか[6]。

その後、「中比」という語についての中世説話集などでの用例の検討が積み重ねられてきたが[7]、「中比」の指し示す範囲について、ある程度狭い範囲での期間に絞り込むことはできないことが明らかになり、その画期の時期や画期となった出来事などを抽出することもできていない。

近年、田中貴子は、日本の文学史におけるタームとしての「中世」と関わって、中世説話集においては、「中間的な過去」という程度の理解にとどめるべきである事、ただし、歌論書においては「中比」が「後代の歌人に影響を与えた古今集」の時代をさし、連歌論においては「中つ頃」が次第に劣る時代を指して使われていることを指摘、そこに衰退史観や仏教で言う末世観に近いものがある事、結局、すべてのジャンルで共通する概念としての「中比」の指す時代を限定することはできないとまとめている[8]。

このように見てくると、「中比」という言葉に込められた意味を考える時に、文学ジャンルによる違いを考慮に入れることの重要性が浮かび上がる。その文学ジャンルが、いつごろから、どのように盛んになり、また逆にいつごろから衰退

していったのか、ということに対する認識によって違ってきて、その中で、ある一定の期間をそのジャンルにおいての中間的な時点ととらえるという現象が起こるのは当然だと思われるからである。従って、四類本『保元物語』について考える際にも、これまでのように説話集や歌論での時代認識を参考にするのではなく、軍記文学作品における用例を見てみる必要が浮かび上がってくる。

本稿は、そうした先行研究に導かれつつ、おそらくは四類本『保元物語』群の諸本の書写の過程で起きたであろう、この冒頭の言葉の変化の背景を、軍記文学での「中比」という方の言葉の意味するところや使われ方を参考に考察を試みるものである。

三、軍記文学における「中比」の用例

『保元物語』のほかの軍記物語作品ではどうなのであろうか。

例えば延慶二、三（一三〇九、十）年という書写奥書を持つ、延慶本『平家物語』における「中比」の用例は次の通りである。

①桓武平氏が伊勢に居住し、地下人にとどまっていた時期をさす用例

……桓武天皇末葉ト申ナガラ、中比ヨリハウチサガテ、官途モアサク、地下ニノミシテ、都ノスマヰウト〳〵シク、常ハ伊勢国ニ住シテ久ク人トナリケレバ、此一門ヲバ伊勢平氏ト申ナラハシタルニ、彼国ノ器ニ対シテ、「伊勢平氏ハ酢瓶ナリケリ」トハヤシタリケルトカヤ。忠盛スベキ様無テ、サテヤミヌ。

（巻一・三「忠盛昇殿之事　付闇打事　付忠盛死去事」）

……忝モ御先祖桓武天皇ノ御苗裔、葛原親王ノ御後胤ト申ナガラ、中比ヨリ無下ニ官途モ打下テ、纔ニ下国ノ受領ヲダニモユルサレテコソ候ケルニ、故刑部卿殿、備前国々務ノ時、鳥羽院御願、得長寿院ヲ造進ノ勧賞ニヨテ、家ニ久絶タリシ内ノ昇殿ヲユルサレケル時ハ、万人瞬ヲ翻シケルトコソ承リ伝テ候へ。何況、御身既ニ先祖ニモ未ダ拝任ノ跡ヲ聞ザリシ大政大臣ノ位ヲ極メサセ給。御末又大臣ノ大将ニ至レリ。所謂ル重盛ナンドガ、不才愚暗ノ身ヲ以テ、蓮府槐門ノ位ニ至ル

（巻二・十八「重盛父教訓之事」）

②柿本大僧正の在世時のことをさす用例

中比我朝ニ柿本大僧正ト申シ、高名ノ智者、有験ノ聖侍キ。大驕慢ノ心ノ故ニ、忽ニ日本第一ノ大天狗トナリテ候キ。此ヲアタゴノ山ノ太郎房トハ申候也。スベテ驕慢ノ人多キガ故ニ、随分ノ天狗トナテ、六十余州ノ山ノ峯ニ、或ハ十人計、或ハ百人計カケリ集ラザル峯ハ一モ候ハズ。

（巻三・二「法皇御灌頂事」）

③和田義盛が語る騎馬での戦の仕方の変遷を、「昔様」「中比」「近代」と説明する場面

……小太郎義盛、郎等真光ニ云ケルハ、「楯突軍ハ度々シタレドモ、馳組軍ハコレコソ初ナレ。何様ニアフベキゾ」ト云ケレバ、真光申ケルハ、「今年五十八ニ罷成候。軍ニ相事十九度、誠ニ軍ノ先達真光ニ有ベシ」トテ、「軍ニアフハ敵モ弓手、我モ弓手ニ逢ムトスルナリ。打解弓ヲ不可引。アキマヲ心ニカケテ、振合〳〵シテ内甲ヲヲシミ、アダヤヲイジト、矢ヲハゲナガラ、矢ヲタバイ給ベシ。矢一放テハ、次矢ヲ急ギ打クワセテ、敵ノ内甲ヲ御意ニカケ給へ。昔様ニハ馬ヲ射事ハセザリケレドモ、中比ヨリハ、先シヤ馬ノ太腹ヲ射ツレバ、ハネヲトサレテカチ立ニナリ候。近代ハヤウモナク押並テ、組デ中ニ落ヌレバ、大刀、腰刀ニテ勝負ハ候也」トゾ申ケル。

（巻五・十四「小壺坂合戦之事」）

①については、平貞盛の四男維衡が伊勢に下向した十一世紀初頭から、平氏が本格的に都に進出した、清盛の祖父正盛の頃（十二世紀初め）までのおよそ百年間をさすと考えられる。②の柿本大僧正とは、空海の弟子の紀僧正真済（八〇〇～八六〇）のことであり、①の「中比」の指し示す時期とは大きく隔たる。③については具体的な年代を推測するのは難しいだろう。

一方、応安四年（一三七一）書写の奥書を持つ覚一本では、七箇所で「中比」の用例が見られる。

④桓武平氏が伊勢にとどまった時期をいう用例

忠盛御前の召しに舞はれければ、人々拍子をかへて、「伊勢平氏はすがめなりけり」とぞはやされける。此人々はかけまくもかたじけなく、柏原天皇の御末とは申

ながら、中比は都のすまゐもうと〳〵しく、地下にのみ振舞なッて、伊勢国に住国ふかゝりしかば、其国のうつは物に事よせて、伊勢平氏とぞ申ける。其うへ忠盛目のすがまれたりければ、加様にははやされけり。

（巻一「殿上闇打」）

⑤色黒だったとされる太宰権帥藤原季仲（一〇四六～一一一九）の在世時をさす用例

五節には、「白薄様・こぜむじの紙・巻上の筆、鞘絵かいたる筆の軸」なんど、さま〴〵面白事をのみこそうたひ舞はるゝに、中比太宰権帥季仲卿といふ人ありけり。あまりに色のくろかりければ、見る人黒帥とぞ申ける。其人いまだ蔵人頭なりし時、五節に舞はれければ、それも拍子をかへて、「あなくろ〴〵、くろき頭かな。いかなる人の漆ぬりけむ」とぞはやされける。又花山院前太政大臣忠雅公、いまだ十歳と申し時、父中納言忠宗卿にをくれたてまッて、みなし子にておはしけるを、故中御門藤中納言家成卿いまだ播磨守たりし時、聟に取て声花にもてなされければ、それも五節に、「播磨米はとくさかむくの葉か、人のきらをみがくは」とぞはやされける。

「上古にはか様にありしかども事出で来ず、末代いかゞあらんずらむ。おぼつかなし」とぞ人申ける。

（巻一「殿上闇打」）

この覚一本の記述は意味が取れない。藤原季仲の在世時を「中比」としつつ、忠盛の昇殿の長承元年（一一三二）の次の年の忠宗の死去によって孤児になった忠雅の話を「上古」としているのである。しかし、傍線部を見ると後述するように「上古・中比・末代」という三期区分で歴史を見ていることは注目される。

⑥白拍子の起源を説明する場面で、鳥羽院の御世を「昔」とし、略装になっていた時期を「中比」とする用例

抑我朝に、白拍子のはじまりける事は、むかし鳥羽院の御宇に、しまのせんざい・わかのまひとて、これら二人がまひいだしたりけるなり。はじめは水干に、立烏帽子、白ざやまきをさいて舞ひければ、男舞とぞ申ける。しかるを中比より烏帽子刀をのけられて、水干ばかりをもちゐたり。扨こそ白拍子とは名付けれ。

（巻一「祇王」）

十二世紀中ごろの鳥羽院の御世を「むかし」とする。本稿の考察の出発点である、四類本『保元物語』の冒頭では一部を伝本を除いて、鳥羽院の御世を「中比」とするわけで、その意味でもこの⑥の用例は注目される。

⑦史実かどうかの根拠は不明ながら、藤原成親の配流に関わって、「昔」三十三ヶ国だった日本の国の数が「中比」に六十六ヶ国になったとする用例

……其時少将涙をはら〳〵と流いて、「日本は昔三十三ヶ国にてありけるを、中比六十六ヶ国に分られたんなり。さ云備前・備中・備後も、もとは一国にてありける也。又あづまに聞ゆる出羽・陸奥両国も、昔は六十六郡が一国にてありけるを、其時十二郡をさきわかて、出羽国とはたてられたり。されば実方中将、奥州へながされたりける時、此国の名所に阿古屋の松と云所を見ばやとて、国のうちを尋ありきけるが、尋かねて帰りける道に、老翁の一人逢たりければ、「やゝ、御辺は、ふるい人とこそ見奉れ。当国の名所に、阿古屋の松と云所や知りたる」ととふに、「まったく当国のうちには候はず。出羽国にや候らん」。「さては御辺しらざりけり。世は末になッて、名所をもはや呼びうしなひたるにこそ」とて、むなしく過んとしければ、老翁、中将の袖をひかへて、「あはれ君は、

みちのくの阿古屋の松に木がくれていづべき月のいでもやらぬか

といふ歌の心をもて、当国の名所、阿古屋の松とは仰られ候か、それは両国が一国なりし時読侍る歌也。十二郡をさきわかッて後は、出羽国にや候らん」と申ければ、さらばとて、実方中将も、出羽国に越えてこそ、阿古屋の松をば見たりけれ。

（巻二「阿古屋の松」）

藤原実方が、陸奥に左遷され、その地で没したのは、長徳四年（九九八）である。その前を「中比」とし、実方の在世時を「末の世」とする。

⑧醍醐天皇（八八五～九三〇）の二人の皇子の在世時をさす用例

昔通乗といふ相人あり。宇治殿・二条殿をば、「君三

代の関白、ともに御年八十と申たりしもたがはず、帥のうちの大臣をば、「流罪の相まします」と申たりしもたがはず。聖徳太子の崇峻天皇を横死の相在ますと申させ給ひたりしが、馬子の大臣に殺され給ひにき。さもしかるべき人々は、必ず相人としもにあらねども、かうこそめでたかりしか、これは相少納言が不覚にはあらずや。中比兼明親王・具平親王と申しは、前中書王・後中書王とて、ともに賢王聖主の王子にてわたらせ給ひしかども、位にもつかせ給はず。されどもいつしかは謀叛をおこさせ給ひし。

（巻四「通乗之沙汰」）

⑨醍醐天皇の御世をさす用例

この世にこそ王位も無下にかるけれ、昔は宣旨を向つてよみければ、枯たる草木も花さき実なり、飛ぶ鳥も従ひけり。中比の事ぞかし。延喜御門神泉苑に行幸あッて、池のみぎはに鷺のゐたりけるを、六位を召して、「あの鷺とッてまゐらせよ」と仰ければ、いかでかとらんと思ひけれども、綸言なればあゆみ向ふ。鷺はねづくろひしてたゝんとす。「宣旨ぞ」と仰すれば、ひらんで飛さらず。これをとッて参りたり。「なんぢが宣旨に従ッて参りたるこそ神妙なれ。やがて五位になせ」とて、鷺を五位にぞなされける。……（巻五「朝敵揃」）

⑧⑨では、醍醐天皇の治世の時期を「中比」とする。これについては後述する。

⑩平安前期の歌人である小野小町の在世時をさす用例

中比、小野小町とて、みめかたち世にすぐれ、なさけのみちありがたかりしかば、見る人、聞くもの肝たましひをいたましめずといふ事なし。されども心づよき名をやとりたりけん、はてには人の思ひのつもりとて、風をふせくたよりもなく、雨をもらさぬわざもなし。やどにくもらぬ月ほしを、涙にうかべ、野べのわかな、沢のねぜりをつみてこそ、つゆの命をば過しけれ。

これなどは、『古今和歌集』の時代を「中比」ととらえる歌論書の時代認識とは一致するが、ここで語られているのは、いわゆる小町の壮衰説話であり、和歌の最盛期といった華やかなイメージとは異なり、疑問も残る。

一方、同じ軍記物語であり、保元の乱の三年後に起きた平治の乱を描く『平治物語』には、「中比」という言葉の用例は見当たらない。ただし、「いにしへより今にいたるまで、王者の人臣を賞ずるは、和漢両朝をとぶらふに文武二道を先とせり」と、儒教的な為政者としてのあり様を説いた後で、平治の乱の当事者である信西と藤原信頼を対照的な筆致で登場させていて、叙述者にとっての現在を「今」ととらえ、「いにしへ」から現在までを見通すといった態度を表している。

こうした『平家物語』のあり方などを参考にして考えてみるならば、この四類本『保元物語』冒頭の「中比」も、叙述主体もしくは書写者の、「今からはある程度遡った時期ではあるが、昔語りになったというほどの昔ではない」という、保元の乱についての時間感覚を示す表現であると考え、保元の乱のような世の乱れのなかった時代としての「昔」と、戦乱がおさまりその間の出来事を客観的に見ることのできる「今」が想定されていると考えてよいのではないだろうか。

書写年代のくだる覚一本『平家物語』で「中比」の用例数が、延慶本『平家物語』の用例数よりも多いという傾向も見逃せない。治承寿永の内乱からやや時間が経過したという意識の強まりを見て取るべきかもしれず、そのような傾向が『保元物語』の諸本流動にも見られるとすると、「中比」という表現を持つ諸本は、「近比」とする諸本と比べたときに、事件に関する時間感覚が違ってきていると見ることはできると考えられる。

四、「中比」と「中古」「中世」

ところで、『平家物語』の成立との深い関わりが指摘され、さらにまた、その歴史認識や時代認識についても、軍記物語諸作品との関係が推測される、慈円の『愚管抄』では、中間的な時代といった意味合いの表現はどのような語でなされているのであろうか。

実は、『愚管抄』には、「中比」という表現は見当たらないのである。そのかわり、「中古」という語が三ヶ所見られる。以下の通りの内容である。

⑪此君ハ、安徳西海へ落サセ給テ後ニ、（後）白川法皇ノ宣命ニテ御受禪アル也。鳥羽院モ堀川院ハ宣命之御沙汰

モナカリケルニヤ。白河法皇ノ宣命トキコユ。サキ〴〵モ加様ナルニコソ。御脱屣後、承元元年月日御堂供養アリ。号最勝四天王院。此御時、北面ノ上ニ西面ト云事ハジマリテ、武士ガ子ドモナド多メシツケラレケリ。弓馬ノ御遊ビアリテ、中古以後ナキ事多クハジマレリ。

（巻二・後鳥羽紀）

⑫寛平マデハ上古正法ノスエトオボユ。延喜・天暦ハソノスエ、中古ノハジメニテ、メデタクテシカモ又ケチカクモナリケリ。冷泉・圓融ヨリ、白川・鳥羽ノ院マデノ人ノ心ハ、タヾオナジヤウニコソミユレ。後白川御スヱヨリムゲニナリヲトリテ、コノ十廿年ハツヤ〳〵トアラヌコトニナリケルニコソ。

（巻三）

⑬サレバ今ハ道理イフモノハナキニヤ。コノヤウヲ、日本国ノ世ノハジメヨリ次第ニ王臣ノ器量果報ヲトロヘユクニシタガイテ、カヽル道理ヲツクリカヘ〳〵シテ世ノ中ハスグルナリ。劫初劫末ノ道理ニ、佛法王法、上古中古、王臣万民ノ器量ヲカクヒシトツクリアラハスル也。

（巻七）

「中古」は、例えば、日本国語大辞典では「その時点からある程度年代のへだたった昔。なかむかし。中世」と説明され、初出例として『続日本紀』があげられている。

しかし、『愚管抄』での用法は、これらとはやや異なる。⑫、⑬の用例を見れば明らかなように、慈円にとって「中古」は、「上古・中古・末代」という時代区分の中に位置付けられる言葉であり、しかもそれは末法思想と結びつけられ、正法の時代である上古が神武天皇から宇多天皇までで、醍醐天皇と村上天皇の御世が上古の末から中古の初めとなり、後白河天皇の時代以後が、末代なのである。⑪で語られる「中古」以来絶えていた武芸を、後鳥羽天皇が始めたとする記述も、後鳥羽天皇の御世が末代に属することによる言い方なのだろう。つまり、「中古」は、末法思想でいう所の「像法」の世ということになる。摂関藤原氏の存在意義を強調し、承久の乱開戦前の後鳥羽院に、藤原摂家将軍のいる幕府との対立を避けることを求めるという『愚管抄』の著述意図から考えるならば、この「中古＝像法」の時代を支えたのは道長ら摂関家の功績なのであり、院政時代はそれのない末代ということになるのであろう。

ところで、「中古」という語は、現在の文学史区分では、平安時代を指し示すのが一般的である。しかし、先程あげた

日本国語大辞典でも、「中古」の語意の説明として「中世」と説明されていた。文学史における「中古」と「中世」はどのように区別されてきたのであろうか。

「中比」という語の用例が見られる（ただし、これについては大系本の頭注が平安朝末期であるとしている）、二条良基の『連理秘抄』でも、時代区分としては「上古・中古・当世」とあり、わが国の歴史区分としては、『続日本紀』の時代から、「上古・中古・近代（または当世）」という三区分が広く浸透していたと考えてよい。

時代を区分して国文学を記述するという作業は、明治時代以降、さかんに行われるようになったわけであるが、そこで、「中世」という用語が使用されるのは、明治三十七から四十二年にわたる講義の記録である、藤岡作太郎の『国文学史講話』において、「太古、平安朝、中世、江戸時代、明治の世」と全体の時代区分をおこなった時が最初である。

それまでは、例えば、明治十年に木村正辞が出版した『国史案』においては「上古・中古・近代」とされ[9]、さらに細分化された時代区分をした、水戸学派の久米幹文が出した『大八洲史』でも「太古・上古・中古・近古・近世」であった。国文学そのものの史的展開に特化した『国文学読本』（芳賀矢一・立花銑三郎、明治二十三年四月）においても「上古・中古・鎌倉時代・室町時代・江戸時代・維新後」とする。藤岡作太郎自身も、明治三十四年の『日本文学史教科書』では、「太古・平安朝・鎌倉室町幕府の世・江戸幕府の世・明治の世」と区分している。

藤岡作太郎が、『国文学史講話』において、はじめて「中世」という用語を使ったのは、明治三十八年に、西洋史が専門の原勝郎が、『日本中世史之研究』を出版し、西欧の「Middle Ages」を「中世」と訳し、おそらくは「武士（騎士）の時代」という共通点から、日本の鎌倉時代から室町時代の期間を指し示す言葉として使ったことと関わると考えてよいであろう。

ここで、あらためて注目したいのは、明治時代当初の時代区分概念が、「上古・中古・近代」（『国史案』）だったことであり、今と昔の間の時代は「中古」だったことなのである。先述した『保元物語』の岩波書店日本古典文学大系本での補注における、「中比」の解説では、「中比」について、半世紀以降は遡らない「近比」以前で、「昔」よりは新しい、「当時にとっての中世」と説明している。しかし、「中世」という語の定着のこうした経緯を振り返るならば、中世人にとって

は、「中世」ではなく、「中古」だったのである。

五、結びにかえて
――軍記物語諸作品の「中比」をどう考えるか。

慈円の認識を参考にしてわかってきたことは、まず、覚一本『平家物語』での「中比」の⑧⑨の用例の意味である。醍醐天皇の御世が「中古」のはじめであるので、その皇子たちも「中比」のころの人ということになるであろう。慈円の時代区分の認識がどこまで一般的だったのかは疑問であるものの、醍醐天皇の名を挙げる時に、すかさず「中比」と付け加えるのは、慈円の、延喜の世が「中古」だという認識の影響なのではないだろうか。ただし、注意しなくてはならないのは、⑧⑨の内容を見ても、そこに末法思想の影響までは見出すことは出来ないように思われることである。

さらに、⑤や⑦の用例でも、「中比」と相対する時期として、その前の「上古」、その後の「末代」「末世」がイメージされているのも確認できるが、それも正法・像法・末法に対応させて語るというほどの、強い末法観があるわけではなく、そこで使われている「末代」は、むしろ「現在」「現代」に近い意味のように思われる。また、小野小町を「中比」の人とするのには、歌論などでの和歌の流れのとらえ方の影響があることも想像される。

また、慈円が、「上古」と「末代」のあいだの期間全体を指し示す言葉として「中古」と言っているのに対し、軍記物語では、「中比」という言葉で昔と現在の間のある一時点を指し示しているという使い分けもあるのだろう。

しかし、それぞれの時代認識には、互いに矛盾するところも多く、「中比」が指し示す年代も九世紀から、鳥羽院以後の十二世紀後半以降と、一定しない。「中比」という時代認識に関する、そうした慈円や歌論での認識のような様々な言説を取り込みつつも、その場合ごとに、過去を振り返る際に使う、昔と現在の中間といったスケールを設定しているように思われる。四類本『保元物語』での「中比」もそうした言語感覚での使用例ととらえるべきなのだろう。

ただ、既に指摘したことではあるが、『平家物語』に関して言えば、覚一本において、延慶本のそれよりも格段に「中比」の使用例が増えていっている事実も無視できない。その変化とおなじような、時間の経緯に伴う大きな流れの中で、

保元の乱が起きた時期を、古態本に比較して「昔」の事だというようにとらえる認識が生まれていたことも事実なのではないだろうか。この事例もまた、諸本流動の一つとしてとらえるべきなのではないかと思われるのである。

使用本文（一部、私意により表記を改めた）

『保元物語』　半井本　岩波書店新日本古典文学大系
　鎌倉本　伝承文学資料集第八輯
　京都大学付属図書館蔵本　和泉古典文庫1
　金刀比羅本　岩波書店古典文学大系
『平家物語』　延慶本　『校訂延慶本平家物語』一～十二（汲古書院）
　覚一本　岩波書店新日本古典文学大系
『愚管抄』　岩波書店新日本古典文学大系

1　岩波書店新日本古典文学大系本では「ちかきころ」とルビをふるが、日下力訳注『保元物語』（角川ソフィア文庫・二〇一五）では、「さいつころ」と校訂している。
2　「保元物語の文学史的意義―文保・半井本および金刀比羅本をめぐって」（『中世文学の世界』（西尾実先生古希記念論集）岩波書店、のち『中世文学の成立』岩波書店）
3　「保元物語に於ける基礎的一・二の問題―諸本先後問題の再検討―」（『国語と国文学』一九六〇年四月号）
4　東京大学國語研究室資料叢書　第八巻『保元記・平治物語解題』（汲古書院・一九八六）
5　「「近曾・近来」と「中比」となど―金刀本系『保元・平治物語』室町期成立の形跡なるものの吟味―」（『軍記と語り物』七、一九七〇・三）
6　この可能性については、新編日本古典文学全集の解説でも否定されているわけではない。
7　野村卓美「『発心集』の時代意識」（『国語と国文学』一九八四年十二月号）、安東大隆「『閑居友』の時代設定―「昔・中比・ちかごろ」考」（『解釈』三十・十二、一九八四）など。
8　「〈中ごろ〉〈中比〉と〈中世〉―時代認識についての覚書」（『日本文学』五六・七、二〇〇七・七）
9　ここでの「中古」は天智天皇の御世から平氏滅亡までである。

（しみず・ゆみこ　成城大学非常勤講師）